

はしがき

本巻は「2015年SSM調査報告書」の第3巻「社会移動・健康」にあたり、社会階層研究の伝統的な関心である社会階層の構造、世代間・世代内の社会移動、地位達成といった論文12本と、日本の社会階層研究では比較的新しい健康というテーマに関する論考3本の計15本が収められている。

以下、各論文の内容を簡単に紹介しよう。はじめに、社会移動のなかでもSSMの中心的な研究テーマである世代間移動および地位達成に関する論文が7本並ぶ（藤原、Ishida、白川、苫米地・三輪、橋本、苫米地、吉田）。藤原は、世代間移動を複数の指標を用いた世代間の職業相関から描き出している。従来の地位達成研究で用いられてきた職業威信スコアに加えて、2つの地位スコアを考案し、SSM調査にあてはめることで、用いる指標によって親子の相関の見え方が異なることを描き出している。Ishida論文は1955年から2015年までの7次にわたる調査を用いて、世代間移動の長期のトレンドを分析している。結果、世代間の関連のパターンおよび強さは安定しており、近年、世代間で階層が閉鎖化したという事実はないと結論している。白川は、世代間移動の性差にフォーカスしている。従来の世代間移動研究は男性に限定したもの、あるいは男女を別々に取り上げたものが多く、本論文は性差を掘り下げて分析した試みといえる。苫米地・三輪は世代間移動に家族構造（キョウダイ数、出生順位）の観点から切り込んだ論考である。家族構造の問題は重要であるにもかかわらずこれまで十分に研究されていなかったということで貴重な試みといえる。橋本は階級概念を用いて、階級構造および世代間移動を描き出している。また、労働者階級内にアンダークラスを見出しその特徴を記述するとともに、世代間移動の分析では階級の閉鎖性が高まっていることを主張している。苫米地は、きょうだい数、出生順位が教育達成に与える影響の趨勢分析ときょうだいデータを用いたマルチレベル分析を行い、きょうだい数・出生順位が教育達成に及ぼす影響を議論している。吉田は高学歴化の結果、学歴の収益が悪化したのかどうかを、学歴と職業との関連、所得に対する収益率の変化を追うことで検討している。

次に、世代内移動と自営業・農業を扱った論文5本を取り上げる（仲、平尾、橋本、瀧川、鈴木）。仲は専門的・技術的職業に従事する自営専門職の職業経歴を系列分析（sequence analysis）によって分析し、5つの職歴パターンが得られることを示している。平尾は、自営業からの退出（廃業）を家族要因（跡継ぎの有無やライフコース）を含めて検討している。橋本は他の資料も駆使しながら、農民層分解の長期趨勢と、最終局面を迎えた今日の状況について分析している。瀧川は、世代内の職歴移動にネットワーク分析を応用することで、階層・階級分類をボトムアップで析出する方法を提唱している。鈴木は世代内移動のパターンが階層帰属意識にどのような影響を及ぼすのかを検討している。

最後に健康に関する3論文（小森田、堀、神林）を紹介する。小森田は労働時間とメン

タルヘルスの問題を扱っている。堀は、職歴上の最長職が高齢者の健康行動に及ぼす影響を分析している。神林は健康と社会的地位の関係について、健康が地位達成に及ぼす影響を職歴情報を生かしてアプローチしている。

以上のように、本巻所収の論文は階層研究の伝統から革新まで、社会階層に軸足を置きながら様々なテーマを扱っている。また、それぞれの論文がSSM調査の長所(7次の蓄積、職歴データ、職業情報、きょうだいデータ、家族情報など)を生かす工夫をこらした分析を展開している。もちろん、多くの研究は途上にあり、中間報告としての論考も含まれている。それらも含めて、本巻の研究が、今後の階層・移動研究および階層と健康研究への参考になれば幸いである。

2018年3月

吉田 崇